

## 目的の詳細

### (学びあい・交流が必要な理由)

農村部の過疎、離農、高齢化の問題に対し、ミャンマーやブータンでは、農村部でのインフラ整備や経済発展がなされ、都市の農村の経済格差が解消されることにより解決するという見方が一般的である。この見方を変えるためには、プロジェクトのミャンマーとブータンからの参加者である村人、NGO、行政、大学関係者に日本の中山間地の現状、近年展開されているインフラ整備や経済活動に偏重しない文化プログラムなどが基礎となった地域づくり活動や、高齢者ケアなどの福祉・保健活動を日本で学んでもらうことが大変有効な方法となる。また、ブータンで提唱されている国民総幸福 (GNH: Gross National Happiness) の理念は経済一辺倒にかわる新たなアプローチとして大きな可能性を秘めている。ミャンマーの指導者アウンサン・スー・チー氏も著書の中でその重要性について言及している。参加者らは日本、ブータンを訪問することでこれらを相互に学び、まだ具体的対策が取られていないミャンマー農村で過疎、若者の農業離れ、高齢化社会問題の克服を目指す市民ネットワークを国際的な相互交流を通して構築する。また、村人と NGO、行政、大学関係者が同じ現場に立って学びあい・交流することで、NGO、行政、大学関係者にも当事者的な実感をより共有しやすいという状況が生まれる。従来、申請者らがおこなってきたブータンと日本の学びあい・交流は、大学と保健省との科研や大学の運営経費を使用したもので、予算的制約からブータンからの日本への招聘者は大学教員、学生、研究者、役人などの政府関係者に限られていた。トヨタ財団の本事業では村人の招聘が可能となり、当事者間の学びあい、交流をより一層促進させることができる。このことが本事業を申請するもっとも大きな理由である。

### (学びあい・交流から得たいもの)

交流と学び合いを通して3つのものを得たいと考える。ひとつは、日本とは異なるミャンマー、ブータンの未来の農村像である。経済に基づく単線的な発展経路で捉えると、経済発展を経て行き着いた現在の日本農村の姿は、現在、急速な経済発展に洗われているミャンマーやブータンの農村の一つの未来像であるといえる。経済発展により日本農村の経済や利便性は大きく向上したが、一方で人々の繋がりや地域の文化は希薄化し、また過疎や高齢化といった問題が出現するに至っている。2013年に日本の農村を訪れたブータン人研究者は「ブータンの村を将来このようにはしたくない」と申請者らに述べている。日本農村が直面している過疎、離農、高齢化の問題を自身の目と交流を通して学び、ミャンマーやブータンの参加者が異なる農村の未来を選択する場にしていきたい。次に、農村が本来持つ価値の再発見である。日本では経済の停滞、社会の閉塞感、また震災などを契機に都市部では希薄な人との繋がりや支え合い、地域文化や自然との関わりといった農村の“価値”が新たな豊かさとして外部の人々から目を向けられはじめている。また、経済発展のなかで急速に変化しつつ

あるミャンマー、ブータンではあるが、人との繋がり、文化、自然は依然人々の暮らしの中に依然強く根を張っている。しかし、これらの価値もしくは重要性に自発的に気づき、評価していくことは困難である。外部の視点から農村が持つ“価値”を評価しあい、それぞれの参加者が農村で暮らすことへの矜持を得ると場としていきたい。

最後に協働して農村問題に取り組む国際連携、地域連携のネットワークである。今や過疎や高齢化は多くのアジア農村で見られる共通課題である。日本では1970年よりこれらの問題に取り組んできたが、いまだ解決策は示されていない。アジアの国々で同様の課題が顕在化してきた今、各地域の現状、考え、取り組みをグローバルな視点から相互に学び、地域の課題解決に向けた取り組みを実践する官民学が対等な立場で参画する地域連携のネットワークは課題を克服する大きな力になると考えられる。